

2. インフルエンザ菌の薬剤感受性と遺伝子変異の

経年的変化の検討

大分大学医学部附属病院検査部

平松和史、三浦慎和、棚町啓之、上野民生、
中野忠男、曲 泰弘、犀川哲典

大分大学医学部感染分子病態制御講座

門田淳一、那須 勝

(目的)インフルエンザ菌は肺炎や中耳炎などの市中感染症の起炎菌として重要な病原体であるが、ラクタマーゼ非産生性アンピシリン耐性(BLNAR)の増加などが危惧されている。今回、当院におけるインフルエンザ菌の薬剤感受性と BLNAR 関連遺伝子の検索を行い、その年次推移について検討した。

(対象と方法)当院検査部において各種臨床材料より 1991 年 1 月から 2004 年 6 月までに分離されたインフルエンザ菌 2123 株を検討の対象とした。薬剤感受性は各種抗菌薬に対して日本化学療法学会標準法に基づく微量液体希釈法で測定した。検討した 14 年間の 1991 年から 1994 年(前期)、1995 年から 1999 年(中期)、2000 年から 2004 年(後期)の 3 期に分け、薬剤感受性の変化を検討した。BLNAR 関連遺伝子の変異は 1991 年から 2004 年の間に分離され、保存されていた 35 株の BLNAR 株について、インフルエンザ菌遺伝子検出試薬(湧永製薬)を用いて PCR 法で検出した。

(結果)各種抗菌薬の MIC₈₀(前期/中期/後期)をみると、ABPC : 1/1/2、CVA/AMPC : 1.56/1.56/3.13、CCL : 8/16/32、CTM : 2/2/8、CPDX : <0.5/0.5/2 などとラクタム系抗菌薬はいずれの薬剤もその感受性は耐性化の傾向を示していた。また OFLX の耐性頻度は、0~0.9%を推移していた。ラクタマーゼ産生菌の割合は前期 : 5.8%、中期 : 7.9%、後期 : 4.1%と大きな変動は認められず、BLNAR (ABPC : ≥ 2 mg/ml) の占める割合は前期 : 5.6%、中期 : 9.1%、後期 : 24.6%と近年著明に増加していた。PCR 法による遺伝子変異の検討では 1999 年までに分離された BLNAR はほとんどが、*fts I* 遺伝子の 526 番アミノ酸変異が考えられる結果であったのに対し、2000 年以降に分離された株では 385 番付近の遺伝子変化も加わっていると考えられる結果であった。

(結語)近年分離されるインフルエンザ菌は各種抗菌薬に耐性の傾向を示し、とくに BLNAR 株の顕著な増加を認め、今後もその薬剤感受性の動向を十分に把握していく必要があると思われた。